注意
　この指導案は、平成 15 年度ＪＩＣＡ教師海外研修後に実践した９時間扱いの「ガーナへ行こう！」から、資料などの道徳に関する部分だけをおもにとりだしたものである。詳細については、以下のＪＩＣＡのＷｅｂページを参照いただきたい。http://www.jica.go.jp/classroom/kyouzaishu/pdf/tebiki02-02.pdf

１．タイトル　ガーナに賭けた青春
２．氏　　名
　学 校 名　　担当教科　社　会　科
３．実践教科　道徳　　時 間 数　１　時間
４．対象生徒　中学校　　年　　対象人数
５．カリキュラム案
（１）実践の目的
　国際理解教育や異文化理解教育が多くの学校で実施されている。その実践は、国際的な感覚を育てる実践だったり、異文化を理解する実践だったりする。確かに四方を海に囲まれた日本にとっては、外国の文化を教える事は重要な事であろう。しかし、それだけで国際理解教育とは言えないのではないか。国際理解教育を実践していく上で頭の中に入れておかなければならないことに、国際理解教育の二面性がある。（１）授業の目標を国際理解におく事。つまり、内容として国際理解を教えること。（２）手段としての国際理解教育。つまり、国際理解教育を利用して、どういう資質・能力を育てていくかということ。徐々に（２）の実践が多くなっては来ているが、（１）でしかとらえられていない国際理解も多いように思われる。これからの国際理解教育は、（１）と（２）の二面性を備えた実践でなければならない。
　こういった考え方から、国際理解教育を通して、学力や生きるために必要な人間の持つべき資質を育てる事も大切であると考える。
　最近のニュースでは、犯罪の低年齢化や小・中学生の凶悪犯罪が目立っている。ある新聞では、日本の家庭では諸外国に比べて、親が家庭において道徳的な教育をあまりしないという調査結果も出されていた。こういったことから、今の生徒に道徳的な価値観を持たせること、道徳的実践力をつけることも大切なことであると考える。
　上に述べた事を考えると、国際理解教育の重要性がさけばれる昨今ではあるが、教科や道徳、特別活動等においてはその目標達成を目指さなければならないのであって、決して教科や道徳、特別活動に取って代わるものであってはならない。こういったことから、本教材は国際理解教育の二面性を活かし、ガーナという教材を通して、ガーナの知識・理解を深めることはもとより、社会科（地理的・公民的分野）の力や道徳的実践力をも育てることを目的とした。

（２）授業の構成案

時限○テーマ◎ねらい	方　法　・　内　容	使　用　教　材
７時限　道徳 ○ガーナに賭けた青春 ◎人類への幸福貢献	日本のことだけでなく世界的な視野に立ち、人類の幸福のために貢献しようとする気持ちを育てる。 ・ビデオを見て、アチュワ村の実情を知る。 ・資料を読む。 ・国際ボランティアの必要性を考える。	（１）ＪＩＣＡ地球家族 意志あるところ、道は通じる ～ｶﾞｰﾅ･ｱﾁｭﾜ村にて～ （２）ガーナに賭けた青春 （３）クロスロード１９８９年４月号

授業の詳細

７時限目　ガーナに賭けた青春
　ガーナのアチュワ村に派遣された青年海外協力隊員の武辺寛則さんが、努力の末にファンティパイナップル（甘みや香りが高いパイナップル）生産を軌道にのせる。さらに、販売経路の確保やパイナップル協会をつくるなど、自分が村を離れてからもパイナップル栽培が継続されるような準備をしていった。そのような中で、武辺さんを「村のナナ・シピ（長老の一人）にしたい」との声が上がり、武辺さんはそれを受ける。外国人のしかも残り１年で村を去る人間でありながら、長老の一人になって欲しかったのは、村の人たちが武辺さんに名誉を与えたかったからであった。
　その後、不慮の事故で武辺さんは他界するが、武辺さんの業績を称えて記念碑が住民の手作りで建てられ

る。
「村人たちがが、ナナ・シピに就いてもらいたいと思うほど、なぜ武部さんはガーナのためにボランティアとして働いたのか」という発問をきっかけに、自己を振り返り、日本のことだけでなく世界的な視野に立ち、国際ボランティアに積極的に関わっていこうとする気持ちを育てていく。

７時（道徳内容項目４－１０、人類への幸福貢献）

段階	学習内容	生徒の活動	教師の支援	・留意点、○評価
導入	・資料を読む前のガーナの事前学習	・ガーナのビデオやプリントを見る。	・ガーナのビデオ映像。 ・アチュワ村に武辺隊員の記念碑の映像。	
展開	・資料を読む	・黙読しながら範読を聞く。 ・あらすじの確認をする。 ・発問に対する答えをワークシートへ記入する。 ・ガーナが好きだった。 ・ボランティアの仕事に生きがいを感じていた。 ・記入したことを発表する。 ・発問の答えをプリントに書く。 ・プリントに記入したことを発表する。 ・説話を聞く。 ・発問に対する答えをワークシートへ記入する。 ・自国だけでなく、外国も豊かになって、初めて環境問題などが解決する。	・範読 ・あらすじの確認をする。 ・発問「村人たちが、ナナ・シピ（長老の中の一人）に就いてもらおうと思うくらい、武辺さんはなぜ、ここまでガーナの人たちのためにボランティアとして働いたのでしょうか。」 ・発問「武部さんのような国際ボランティアをしたことがありますか」 ・説話 ・発問「説話を聞いて、他国のために働くことは、どのような価値や意味があると思いましたか。」	・武辺隊員の生き方に注目させる。 ・国際化が進む中で、国際協力が必要であることを強調。 ○国際協力の必要性が理解できたか。
終末		・発問に対する答えをワークシートへ記入する。 ・郵便局のボランティア貯金をする。 ・企業等で実施している募金活動に募金する。 ・記入したことを発表する。	・発問「今後、どのような国際ボランティアに関わっていこうと思いますか。」	○今後の国際ボランティア活動に対して、前向きに考えられたか。

注意・・・本時の道徳は、授業の対象とする生徒が違うため、1 時間でも授業が成り立つように構成してある。

第７時
・地球家族「意志あるところ、道は通じる～ガーナ・アチュワ村にて～」（ビデオ資料）　　国際協力機構

・クロスロード（1989 年 4 月号）　「意志あるところ、道は通じる」～ガーナ・アチュワ村にて～　武辺寛則
・国際ボランティア貯金のパンフレット　日本郵政公社

資料入手先
・地球家族「意志あるところ、道は通じる～ガーナ・アチュワ村にて～」（ビデオ資料）は、ＪＩＣＡで貸し出している。

・クロスロード（1989 年 4 月号）は、ＪＩＣＡに１部しか残っていないとのことであったが、お願いをしたところコピーをしていただいた。なお、資料として使った文章は、武辺氏の文章に実践者が加除したものである。

・クロスロード（1989 年 4 月号）に掲載された文章も含まれた武辺氏の著書があるが、絶版になっており、古本市場でも入手困難である。ＪＩＣＡガーナ事務所には１冊保管されているが、１時間の道徳の資料としては、クロスロードの文章でも十分すぎるほどである。

・国際ボランティア貯金のパンフレットは、郵便局内に掲示してあるもの、掲示していないものでも有効利用できるものがあるので、窓口に相談していただきたい。教育目的である旨を話したところ、一般には貸し出ししない資料も借りることができた。

６．授業全体を通しての生徒の感想

注意
　この感想は、9 時間扱いの「ガーナへ行こう！」実践後の感想であり、道徳の授業１時間のみで得られたものではない。

　今までは、あまりボランティアに興味がなく、募金などもしたことがなかったけれど、「ガーナへ行こう！」をやって、発展途上国や困っている国に自分が今出来るユニセフ募金などをしたいと思いました。また、将来は、青年海外協力隊員になって、ボランティアをしたいと思いました。
　ガーナでは、学校に行けない子どももいるので、今自分が普通に学校へ通える事を幸せに思いたいです。小さい赤ちゃんは、栄養不足から死んでいく場合もあるので、学校の給食はもちろん、好き嫌いせず残さず食べないといけないと思いました。さらにガーナは、学校で使う文具なども数が少なく、紙がとても貴重だという事なので、文具や紙なども丁寧に大切に使いたいです。

　先進国と発展途上国の貧富の差を思い知った。そして、その差を埋めるために色々な人や色々な国が協力している事を知り、すごく感銘を受けた。同じ地球上に住む人間として、各国の貧富の差を埋めていければいいと思った。そして、すべての人が幸せに暮らしていける世の中にしていきたいと思う。そのためにも募金をしたり、青年海外協力隊の一員になりたいと思った。ただ、一方的に助けるのではなく、その国がきちんと自立していけるように、人材を育てる事も大切だということも分かった。富を築くのではなく、かたくなに現地の人のために働いているボランティアの生き方に、尊敬の意を表さずにはいられなかった。
　そんな生き方は、きっと私にはできないと思うけれども、自分で振り返って、いい人生だったと思える人生を歩みたい。

　発展途上国というのは、日本のような先進国とは生活の様子が違う事は知っていたのですが、ガーナの教育についてなどの授業を受けて、こんなにも違うものかと驚きました。また、青年海外協力隊についても知る事ができ、とても興味を持ちました。日本はガーナの他にも発展途上国に色々と協力しているのだなあと思いました。
　ガーナの授業を受けてから自分たちの生活を振り返ってみると、１時間の授業が終わるたびに「もう勉強いやだー」と言ってみたり、平気で給食を残していた事を、重く受け止めるようになりました。ガーナについて授業でたくさんの事を教わったけれど、私たちが知らない事はまだまだあると思います。だから、もっと発展途上国の生活の様子などを知り、少しでも自分が力になれたら良いと思います。また、この発展途上国の現状を色々な人に知ってもらえば、より多くの人の協力が得られると思います。
　私は、インターネットで国際ボランティア団体について、古切手の収集、古着の寄付などのついて調べてみましたが、次は実行してみようと思いました。

ガーナの学校を見たのが印象に残りました。屋根があるだけで壁がないところもありました。勉強するには、先生も施設も勉強道具も充実していない。日本に生まれ、良い環境の中にいるのに、ろくに勉強していない自分がとても損をしているように思えました。
考えさせられた事と言えば、カカオ豆貿易ゲームです。一生懸命カカオ豆を作っても安くしか買ってもらえず、天候に大きく影響され、これだとガーナの人々も働く元気が出ないんじゃないかと思います。
ガーナという国を、私は今まであまり知りませんでした。「国名ぐらいは聞いたことがある」程度の国でした。だから今回の学習で、自然環境、農産物、かかえている問題など、さまざまなことを知りました。子どもの教育や貿易の問題は、ガーナだけの問題ではないので、日本などの先進国がお金の面だけでなく、教育や技術の面でも支援していかなければならないと思いました。

今まで「ガーナへ行こう！」を勉強してきて印象に残っているのは、カカオ豆貿易ゲーム、ガーナの学校、そしてガーナのチョコレートを食べた事です。とても不平等だと思ったカカオ豆貿易ゲーム。天候に左右されやすく、カカオ豆を作っても価格が下がってしまったりして、ガーナはいつも不利だと思いました。ガーナにはフランスなどのように、おいしいチョコレートを作る技術がなく、そのためにカカオ豆を輸出しても国際価格が変動したりします。これが、ガーナが発展途上国から抜け出せない理由の１つだと思いました。でも、私はガーナのチョコレートが好きです。
最も印象に残ったのは、ノエムコミュニティーにある小学校と、アマノクロム・プレスビー・プライマリースクールのビデオを見た事です。日本の学校は、きちんとした机やいすがあり、教科書や黒板があったり、勉強するには十分な環境が整っています。しかし、ビデオで見た学校は、壁にひびが入っていたり、壁がなかったりと勉強に適する環境が整っていません。
今、自分の置かれているとても豊かな環境が当たり前だと思っていた私は、ビデオを見てショックを受けました。ガーナは「子ども（児童）の権利条約」を批准しているのに、「どんな人でも学校に通っていい」ことが保障されないことは、いけないと思います。そして、十分な教育を受けられない子どもたちは、かわいそうだと思いました。
私が今暮らしている日本は、戦争もなく平和で教育も受けられるし、とても豊かだと思います。でも、今回「ガーナへ行こう！」の授業を受けて、日本がある地球にガーナという発展途上国もあることが分かりました。このような発展途上国がまだまだあるのかと思うと、今まで自分が「当たり前」と思っていた毎日の生活が、とても大切なものだと感じました。豊かな国である日本だからこそ、発展途上国にできることがあると思います。でも今の私には、何を具体的にどうすれば良いか、まだ分かりません。しかし、「何かしたい」と思っている事は確かです。身近にできる「募金から」始めて、自分に何ができるか分かった時に実行したいと思います。
今回、「ガーナへ行こう！」から学んだ事は、一生忘れないでいたいと思います。そして、今後の生活に生かしたいです。

７．成果と課題

昨年度、本校の卒業生でもあるＪＩＣＡ職員を招いての国際理解教育講演会と、「ガーナに賭けた青春」「ガーナでの国際ボランティア活動」の影響から、将来は青年海外協力隊員としてボランティア活動をしてみたいと考える生徒が多くなった。その気持ちがさめないように、啓発活動を継続していきたい。
今回は、社会科と道徳を関連付けた授業構成にした。学習指導要領解説道徳編の「改訂の経緯」には、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。」が第一にあげられている。また、学習指導要領解説社会科編の「改定の趣旨」には、「日本人としての自覚を持ち、国際社会の中で主体的に生きる資質や能力をいくせいすることを重視して内容の改善を図る。」とある。よって、道徳と社会科を関連付けた実践は、意味のあるものだと考える。しかし、道徳は道徳価値観と絡めて動機付けをするもの、社会科は社会認識を通して公民的資質を培う教科である。このように目的が違う。「横断的な学習」として位置づける事は簡単ではあると思うが、社会科と道徳の区別をどのように明確化するかが課題となるだろう。